1990

京都精華大学

Faculty of Art

Department of Fine Arts
Oil Painting
Japanese Painting
Sculpture
Ceramics
Printmaking

Department of Design
Visual Communication Design
Urban Living Design
Textile Design
Cartoon

Faculty of Humanities

Department of Humanities

Kyoto Seika University

EX-LIBRIS-SEIKA
010402498

2012/06/12
01040249
京都精華大学　寄贈
京都精華大学情報館

〝開かれた大学〞を目指して

これからの大学は〈開かれた大学〉であるべきです。それは、大学の外の社会に対して開かれていることと、日本の外の世界に対しても開かれていることを意味します。

われわれの大学は、これまでも、そのような理念で運営されてきましたが、1987年度から、つぎのような方法で、いままでの学生層とは異なる人々にも門戸を開放しています。どうかふるって応募し、この大学に新風を吹きこんで下さるよう期待しています。

●社会人入試

これからの日本は高齢化社会に向っていきます。美術学部では第二の人生を迎えようという、原則として40歳以上で意欲に燃えている方を、人文学部では2年以上の社会経験をもつ若い方から高齢の方までを対象としています。

●帰国子女入試

海外に滞在して高等学校卒業程度の教育を受けたのち帰国した子女は、大学において、海外での経験や知識を生かしてほしいものです。本学はそのような帰国子女に対して、門を開いています。

●留学生入試

外国からの留学生は従来も受け入れてきましたが、積極的に歓迎します。まだ不十分ですが入学者全員に奨学金制度を設けています。

以上、「社会人入試」「帰国子女入試」「留学生入試」それぞれ10名程度を受け入れる予定です。これら多様多彩な人々が入学することは一般の学生によい影響を与えることにもなると思い、おおいに期待しています。

1968(昭43)　京都精華短期大学（共学）を開学
　　英語英文科（英米文学コース・秘書コース・貿易英語コース・ガイドコース）
　　美　術　科（絵画コース・デザインコース）
　　「アセンブリー・アワー」始まる
　　「The Kyoto Seika English Papers」発刊
1970(昭45)　美術科に染織コース増設
　　「木野通信」刊行始まる
　　「木野評論」（年1回刊）発刊
1972(昭47)　英語英文科に国際文化コース増設
1973(昭48)　美術科に立体造形コース、デザインコースにマンガクラス増設
　　第2外国語に朝鮮語開設
1975(昭50)　伊谷記念朽木学舎オープン
　　「The Kyoto Seika English Papers」を「Kyoto Review」に改称
1979(昭54)　京都精華大学美術学部開設
　　造形学科(洋画・日本画・立体造形)
　　デザイン学科（デザイン・染織・マンガ）
　　京都精華短期大学英語英文科は京都精華大学短期大学部英語英文科に改称
1982(昭57)　京都精華短期大学美術科を廃止
1985(昭60)　丹後学舎オープン
1986(昭61)　美術学部造形学科に版画専攻と陶芸専攻、同デザイン学科にアーバンリビングデザイン専攻の増設を決定

美術学部
- 造形学科
  - 洋画専攻
  - 日本画専攻
  - 立体造形専攻
  - 版画専攻
  - 陶芸専攻
- デザイン学科
  - ビジュアルコミュニケーションデザイン専攻
  - アーバンリビングデザイン専攻
  - テキスタイルデザイン専攻
  - マンガ専攻

1989(平1)　人文学部開設

大学空間論

学長　笠原芳光

大学はいわゆる学校ではありません。単なる高等教育機関でも、よくいわれる教育と研究の場でもありません。

大学は大いなる空間です。壮大な知的空間です。もし現実の大学が、そうでないのなら、そのようになるべきです。いや、そうしたいものです。

教育をするだけなら、教室や実習室やグラウンドがあればよいでしょう。研究をするためなら、研究室や図書館があればよいでしょう。大学にはもっとほかのものが要るのです。

さいわい、わたしたちの大学には山があります。谷があります。樹木が茂り、草花も咲いています。水が流れています。道も坂も崖もあります。なによりも、その間を大気が漂っています。

それら人工と自然の、有用なものと無用ともおもえるものによって、大学という空間は成りたっているのです。

勉強するためだけなら、すぐれた講師がそろっているカルチャーセンターでもできます。研究するには設備のととのった研究所があります。大学がカルチャーセンターや研究所と異るのは、このような余分ともおもえる空間の有無であります。

ところで大学という空間は知的空間です。学生とはなによりも知を学ぶ存在です。教師とはするどい知的刺激を与える人です。学者とは高度の知の探求者です。

その知とは狭義の知識ではありません。頭脳と身体における、思索と行動による、人間と世界の全体にわたる、ゆたかな精神の所産であります。

大学は空間であるといってきましたが、それは空間であるとともに時間でもあります。学生にとって大学の4年間は貴重な時間です。4年間は長いでしょうか。短いでしょうか。時間とは暦の時間、時計の時間だけではありません。それは瞬間であり、また永遠であります。

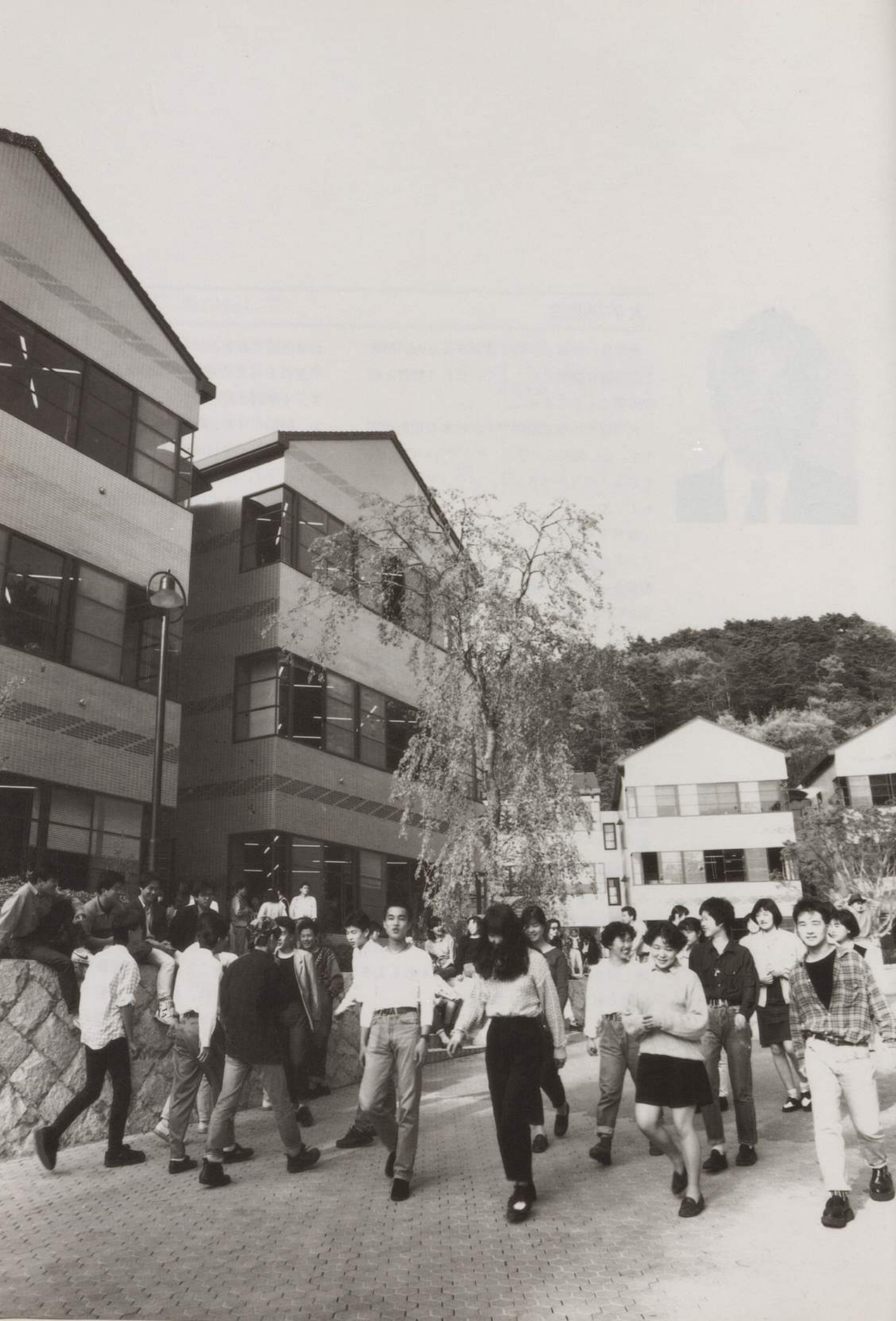
大学における時間は人生におけるひとつの猶予された期間です。それを弛緩したものにすることも、充実したものにすることもできるでしょう。時間は人間が長くしたり、短かくしたり、生かしたり、殺したりすることのできるものです。量的には限定された時間でも、質的には自由な時間であるからです。

大学における、このような空間と時間は、一見、無用のもの、役に立たないものとおもわれがちです。たしかに、この世の中のあらゆるものを有用と無用、役に立つ、役に立たない、に分けてしまう考えかたもあります。

しかし、たいせつなのは無用の用という逆説です。表層において無用とみえても、深層において有用ということがあります。大学はまさに、その無用の用として、この世界に存在しているのです。

講義を受けること、ゼミで発表すること、制作に励むことは、もとより大事ですが、なにもしないで、キャンパスの空間をさまよう時間もまた大切です。

その時に、なにかを感じ、なにかを考える、そこに大学は存在しています。



アデレイド大学（オーストラリア）

International Exchange
国を超えて

国際交流プログラム

京都精華大学人文学部は国を超えて学びあう場です。文化の異なる人びととのつきあいは非常にむつかしいということがよくいわれていますが、ここではそういった異なる社会文化こそが基本的な前提です。困難といわれていることを、みせかけのためではなく、あえて基本においているのには理由があります。

多様な考え方、ものの見方があうのでなければ、教育や研究は生命力を失ってしまうと考えているからです。また、人間としての共感には国や民族に規定される文化を超えるものがあると信じていることは、いうまでもありません。

人文学部の前提である国際交流は、教員の構成にもあらわれているとおりですが、留学生や交換学生もさまざまな国から集まってくる計画です。毎日の授業、課外生活のなかで、それぞれが独自のものの見方をもちながら、対等に尊重しあうのです。また、少人数のグループにわかれて行う、京都、その他日本各地でのフィールドワークのなかで、こういった留学生の存在は、よい刺激になるでしょう。つまり、国を超えた共同研究のスタイルをカリキュラムのなかにとりいれたのです。

知力、行動力を発揮して、この交流の創造に加わろうという学生諸君を待望しています。

こういった国際交流を促進する一端として、海外の大学、研究施設との提携があります。すでに協力提携を結んでいる大学には、アメリカのアンティオーク大学、タイのチェンマイ大学、オーストラリアのアデレイド大学があります。いずれの大学とも、教育・研究のさまざまなレベルで緊密な交流を進めていく計画です。交換学生としての留学が可能であることはいうまでもありません。

アンティオーク大学から京都精華大学へ

教育にたずさわる私たちのだれもが、学生が地球社会に生きる準備を心がけねばならず、地球共同体の市民を教育するために、どんなカリキュラムの変更が必要かを、いま考えていかなければなりません。これまでの世代以上に、自分の街、地域、国を超えて知らなければならないことがあるのは明らかです。しかし、他国を、その文化を、本や映画などで知るだけでは充分ではありません。異なった価値観や生活様式に妥当性があることをほんとうに理解し、その真価がわかるようになるには、その異文化のなかで暮し、働くという直接的体験が必要です。

文化について謙虚であること、多様な文化にたいして狭量でないこと、そして地球社会に生きる能力とは、学生の側にたつ私たちが努力すべき教育目標です。アンティオーク大学では、こういった目標にかなうカリキュラムの編成にとりかかっています。京都精華大学もこれと同じ希望をもっているでしょう。その実現にむかって私たちも共に働くことができるものと思います。

アラン E. ガスキン
アンティオーク大学学長